

賞金目当てだけでなく

谷川直子



谷川直子
作家 神戸市出身。高橋直子
の名前で競馬エッセイ、海外競馬ルポ、ファッション評論、小説など幅広く活動。訪ねた海外の競馬場は30以上。05年から五島列島に移住し谷川直子と改名した。『競馬の国のアリス』『ステイゴールド物語』など著書多数。最新刊は電子ブック『ゆうべ不思議な夢を見た』。MBSの携帯サイトで「馬・あいにくいます!」を連載中。

以前、イギリスで馬を持ったことがある。資産家でも実業家でもない普通の日本人が数人集まって、タタソールズのセリで馬を買いニューマーケットの調教師に預託してレースに出走させた。イギリスではそれが簡単にできたのだ。その牝馬は気性が荒く、残念なことに走るのが遅かったので(血統的には速いはずだった)一度も勝つことができずに引退した。生涯で稼いだ賞金は、デビューしたウォルバーハンプトン競馬場でもらった「今日のお手入れ一等賞」だけ。イギリスの競馬場までレースを見に行くのはお金も時間もかかったから大損である。でも楽しかった。競馬の本場イギリスで馬を持っていることは大きな喜びであり小さな自慢だったのだ。

今年から国外居住の外国人馬主の認可が始まる。JRAの競馬は公正で、なんとと言っても賞金が桁外れに高く、レースのレーティングも上がってきているし、競馬場は清潔で美しく、華やかな社交の場とは言いがたいが、スタンドのファンの熱狂ぶり(タイには負けるかもしれないけれど)世界一と言われるほど感動モノ、とくれば興味をそそられる海外の

馬主は多いことだろう。日本の競馬は狙われて当然なのだ。ただしJRAの審査は経済面、人物面の両面でかなり厳しく、決まりごとたくさんある。当たり前だが、とにかく日本で馬主になった以上はすべて日本式に従ってもらうというわけだ。

しかしなんだか黒船がやって来るようで不安になるのはなぜだろう。馬主登録基準の国外居住者の項に「国家元首などの取り扱い」などという記述があるせいで、かつてイギリスにドバイのモハメド殿下が率いるゴドルフィンが進出していったときのことを思い浮かべてしまうからだろうか。ゴドルフィンはあつという間にイギリス競馬を席捲した。あの頃イギリスの競馬ファンの間では「勝つのは読めない名前の馬」という法則まであった(アラブ語の馬名は子音が多く読み方がむずかしいから)。そのくらいゴドルフィンの勢いはすごかったのだ。当然イギリスの競馬関係者はおもしろくなかったはずだ。

今回の解禁には数字的にも規制があって、これと同じような状況が日本でもすぐに生じるわけではない。しかし似たようなことは小さな規模ながら確実に

に起こるだろう。規制が緩和されると競争が始まる。海外にはとんでもないお金持ちがいるので、戦いはシビアになるかもしれない。とにかく日本の馬主の方々には、外国人馬主にいい馬、いい調教師、いいジョッキーを取られないように踏ん張っていただきたいと思う。国際化の流れは止められないが、私は日本人のチームで日の丸を背負って走る馬が好きである。ちなみに、JRAが馬主資格の審査基準として挙げているIFHA(国際競馬統括機関連盟)には、アルファベット順でアルジェリアからヴェネズエラまで60ヶ国が加盟している。やって来るのはアラブの王族だけとは限らない。

願わくば、参入してくる外国人馬主たちに、単に賞金目当てだけではなくて、日本の競馬の一翼を担うこと自体に喜びと誇りを感じてもらいたいと思う。日本で馬を持つことを自慢してほしい。彼らにそうさせることができたとき、我々は堂々と日本競馬を一流と呼べるのではないか。外国人馬主認可の意義の一つをそこに見出せたら、と期待する。